

説教 『祈りと執り成し』山本 護 牧師
 聖書 アモス書 5:21~25 / ローマの信徒への手紙 8:26~28

「お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。豎琴の音もわたしは聞かない(アモス 5:23)」。米国黒人教会の「call & response」の讚美はダメで、修道院のグレゴリオ聖歌ならいいのか。もちろん、そんなことではない。神は祭りを嫌い、収穫感謝や動物の犠牲も拒否している(5:21~22)。神殿での伝統的な信仰儀礼なのに、なぜなのか。これらは、民がエジプトを出て荒野を彷徨っていた最初期にはなかった(5:25)。豊穡なカナンに定着した後、土地の異教習俗に影響されてできた諸々の信仰儀礼を、神は拒絶した。定住し、礼拝形式が整備されてもなお、神の民がめざすべきは荒野の旅なのだろう。

エレミヤも同様の預言をしている。「わたしはお前たちの先祖をエジプトの地から導き出したとき、わたしは焼き尽くす献げ物やいけにえについて、語ったことも命じたこともない(エレミヤ 7:22)」。つまり、信仰の原点回帰を命じているのだ。礼拝は本来的に、儀式でも、作法でもない。ただ「正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きることなく流れさせる(アモス 5:24)」神の御前に進み出ること。

祈りの作法も礼拝様式も、心情的に求められる宗教形態に他ならない。実際には「わたしたちはどう祈るべきかを知らないが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してください(ロマ 8:26)」のだから。私たちの不完全な祈りは、霊の執り成しによって御心に結ばれ、その御心は逆流して現実となる。私たちは一人残らず完全に(神に)知られており(8:27)、「万事が益となるように(神が)共に働くということ」を、わたしたちは知っている(8:28)。愛の働きは執り成された「通路」から流れ込み(8:27b)、私たちはこれを受ける。私たちは無力のまま主体的になり、霊と結んで愛に動かされていく(8:28)。

それにしても霊は、神の息吹きでありながら、苦しんで「うめく」のか。「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださる(8:26)」。霊は、弱い私たち自身としてうめく。あの時、イエス・キリストによって現された神の愛が、霊として私たちの中に生起する。あの時のイエスのように、霊は私の弱さを負ってくださっている。キリストは十字架でひどい傷を負い、天に挙げられてもなお傷は癒えないままではないのか。キリストと一つなる霊はうめき、私たちの祈りを益あるものにしようされる(8:28)。

神はただ、「わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたたちの神となり、あなたたちはわたしの民となる(エレミヤ 7:23)」と告げた。その声を聞こうとしても「わたしたちはどう祈るべきかを知らない(ロマ 8:26)」。だから霊が「言葉に表せないうめきをもって執り成してください(8:26)」。しかし実際の手応えとしては、「鏡におぼろに映ったものを見ている(1コリント 13:12a)」感じかもしれない。たとえ「今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる(13:12b)」。隅々まで神に知られているように、やがて私たちもはっきり知ることになるだろう。

私たちの不完全な祈りは、霊のうめきによって完全に聞かれている(ロマ 8:28)。私たちは霊に執り成され(8:27)、傷を負って生きておられるキリストに執り成されている(ヘブライ 7:25)。だから人間がつくった「宗教形態(アモス 5:22)」に捉われずに、いただくばかりの「正義と恵みの業(5:24)」を見つめよう。



【おまけのひとこと】

キリストの傷は癒えず 聖霊はうめく 神の国は 執り成されて世の苦難とつながっているから 執り成す者は無傷ではいられない 当事者よりもいっそう当事者となる キリストである聖霊が